

薪能奮戦記



「どうして薪能を始めたのですか」

平成十二年の新緑も爽やかな午後、ウイークエンドインタビュという土曜の朝のテレビ番組の取材ということで、私は茅門の内側に椅子を置いてKKBの百田局長の質問を受けていた。

「入来薪能」の原点と言えば平成十年の初夏に私たちが行った町起こしイベント「渋谷氏下向七百五十年」の三木靖先生の記念講演が未完であったことから始まる。引き続き講演会をという希望が多く、大勢の方に参加して頂くには何か企画が必要だと思っていた矢先に、「鹿児島には能楽堂がない」というぼやきを聞いたのがきっかけとなった。

私たち夫婦は現役の頃、東京で観世鍊仙会の重鎮、若松健史氏に謡曲の個人指導を受けてい

た。ふと歴史のある入来町の清色城址で薪能はどつだろつと閃いた。若松先生は当時岡山の上稲荷で毎年薪能を演じられていた。

「ご相談すると、ともかく現地を見てみましょう」ということで、私達夫婦は、晩秋の一日、先生をご案内したのだった。先生は

「なかなか趣のあるところですね。これなら千五百人は入れるでしょう」

とおっしゃった。

さてそれからが大変である。

その一週間ほど後、「早慶懇親会」が山形屋であった。かつて山形屋主催の薪能が催されたことがあると聞いていた私は、山形屋の社長でいらした岩元恭一氏に「薪能を企画したいのですが」とそのノウハウを教えてほしいと頼んだ。氏は即座に女性の秘書にその件の面倒を見るように指示して下さった。そしてまた一週間ほど後に、山形屋内で当時の薪能担当の野上瑞夫氏から一切の資料を戴くことが出来たのであった。

その岩元氏の「厚意も、稲門会長松元茂氏の「支援」ともに決して忘れることはないだろう。

戴いた資料をもとに出入りの棟梁と検討して細かに見積りを立てた。役場の企画課にも相談して、課長に町の主立った青年団体の責任者を糾合して、活動の母体「入来花水木会」の支援会を結成して頂いた。まだ入来に住んで五年にもならない私には、町にある様々な青年の団体など何も知らないし、若い人達のボランティア的援助がなくては、財源もない私にはこうした大きなイベントは実行不可能である。

支援会の会合は、若者たちの仕事の終わる夕刻から我が家で四回ほど開いただろうか。映画祭や夏祭の大きなイベントを何回も行っている彼らは、テキパキ具体的に作業分担など決めて行くので、私にはとても心強かった。ただどんだん出てくるアイデアに当方の懐具合を考えると、内心ヒヤヒヤもしていた。

実際の舞台制作や音響・照明など想像だけで

は心もとない。私は七月半ばの岡山の最上稲荷新能を担当者で見学する必要があった。私は僅か十萬円の予算で六名行く計画を立てた。

まずワゴン車を無料でお借りして、当日の朝七時入来出発。高速を走り詰めで四時に最上稲荷着。会場の設営や舞台、照明などそれぞれの担当者がじっくりと見学して、薪能を拝見。稲荷祭の担当者の経営する宿に泊まってお話し伺って、就寝は十一時頃だったろうか。翌朝の八時には帰路に着いて、夕刻に入来に到着。この強行軍に女性二人は、揺れのきつい車の最後部にいた。最高齢の私は一週間というものの腰痛に悩まされたのだったが、この調査が「能」など見たことのない彼らに実行の自信をつけることが出来た。

さて収入源はチケットの売り上げである。山形屋さんの協力と、あとは直接申し込みのあった方々へお送りするのだが、何と言っても宣伝して周知させなければならない。それにはマス

コミの絶大な力が必要である。有り難いことに南日本新聞の紙面に取り上げられ、民放のテレビ局各社も協力して下さった。また生活情報紙にも報道して頂いた。結果は町始まって以来の千名もの観客であった。無謀にも千三百枚完売という計画で始めた事だったので、内情は大赤字ではあったのだが、それは覚悟の上だった。

当日は時折の驟雨に悩まされた。それぞれ会場の設営に苦勞したことだろつ。支援会の動員力は大変なものだった。大勢の若者が活き活きと作業をする様は壯観で、私は心から感激した。熱意が天に通じたのか午後は晴れ上がって、夕刻には頭上を山に帰る白鷺やすだく虫の音が風情を添えた。この辺の描写は南日本新聞の南風録に報じられている。

南国の遅い夕暮れに、仕舞、狂言が演じられた後、火入れ式があつて松明からかがり火に火が灯った。暗闇に赤々と燃えるかがり火の中の舞台は実に幻想的である。

ずっしりとした重畳感のある舞台も終わり、能楽師をお送りして会場に戻る。皆は懸命に片付けていた。すると敷いていた畳をトラックに収納し終わったとたんに、雷鳴と大雨が頭上を見舞ったのだつた。

初めての「能楽」が観衆に与える感想はどうだろつかと、私はずつと緊張していた。しかし口々に「素晴らしかった」「感動した」と言われて心底ホツとしたのだつた。感激のお便りや短歌、俳句も沢山戴いた。

しかし昨年平成十二年当初は、私は開催を迷っていた。次回も何の補助も受けられそうもないので赤字は必至であった。それに私は口さがない噂に腹を立てていた。町始まって以来の地元以外からの観衆に「大儲けしている」とか「赤字だったそうだが、付けを町に払わせているそうだ」とか、私には想像もつかない噂が耳に入ってくる。「人の口に戸は立てられない」という諺は、狭い田舎ではやっかみから来る誹

謗の習癖をいつのだということをお私には知らなかつたし、その対応にも慣れていなかった。

一方には「継続は力だ」「頑張れ」という声援もある。来年の案内を希望して、住所・名前を書いて行った人も三百名ほども居た。それに若松先生は私の悩みなどご存じなく、次回の計画を進めていらつしやる。ここはやつぱり頑張るしかないと決心したのだった。演目は唯一の女武者物「巴」であった。女物らしいきれいな色どりのポスターを作成。JRの駅にも貼つて下さるといので、JRの規格にそつた大型の物も作成した。

しかし昨年は天が味方してくれなかつた。異常気象で開催の三日ほど前から大雨であつた。二日前にはあちこちで道路が不通になつた。前日も止まないで舞台の準備が全然出来ない。気象庁に何回も問い合わせたが、翌日も止むことはないだろつとつ返事である。遠方の何人もの方から行く手段がないという電話も入つて

くる。昼食後急遽担当者を集まつてもらつて協議して中止するしかないということになつた。

能楽師の方々にすぐに連絡をとり飛行機のキャンセルをする。マスコミにも中止を報じてもらつた。私は払込票のある人々全員に片端から電話を掛けた。ただ留守などで出られなかつた方にはそれで失礼してしまつたが、それは時間的にも精一杯であつた。

当日の午後になつて雨は上がった。スタッフの何人かは連絡不十分で来られた方のため会場入口で待機してお断りしてくれた。

私はチケットの払戻しの作業に一カ月近くかかり、心労で体調を崩してしまつた。高血圧に不整脈ということで医者に「何時死んでもおかしくない」と言われて、びつくりして真面目に薬を飲むことにした。そして十月の反省会で「もう来年は出来ない」と皆に宣言したのだつたが……。

気落ちしている私を励ますお気持ちからか、

若松先生が見事な房の「揚げ幕」をプレゼントして下さった。「中止で迷惑をお掛けしたのに」と申し訳ない気持ちで私の決意を簡単に引つ繰り返す。血圧も安定している筈である。やはりこの素晴らしい伝統芸能の感銘をより多くの人に伝えることが私の使命でもあるように思えて来た。そして俄然今年は張り切つての再スタートとなった。演目は九州ゆかりの修羅物「清経」である。

有り難いことに鹿児島市役所の方が、市内の広告塔に張り出すとよいと教えて下さった。その権利は、二カ月前の一日九時から抽選でということである。四月一日、私は七時前に家を出て車を走らせ、若い人に混じつて抽選会に臨んだ。それは十日間の権利で続けては取れない。しかしついている私は広告塔と掲示板の両方がとれた。今月の五月一日もまた行つてくる事が出来た。

とれたのはいいが、二十七枚の広告塔、五十

八枚の掲示板に貼る作業が問題である。先日入来から鹿児島市内に勤務している人に、「朝五時に出発して貼つて下さい。城山観光ホテルの朝食ハイキングを御馳走しますから」と無理を頼んだ。六月一日、二十一日、七月十一日と三回もある。八月も一回取れるかもしれない。貼る作業には夫と私も参加するつもりでいる。市内は全く不案内な私達の珍作業の報告はまたの機会のお楽しみに。

赤字解消には広告を集めるといつ手段があることを知つたのは、昨秋の「蠟燭能」のプログラムを拝見したことからである。何の後楯もない私であるが、今まで奇跡のように大勢の方々のご厚意によつて支えられて来た。この件も協力して下さい方が現れることを祈りつつ、今日も明るく頑張っている。

